



令和6年(2024年)9月27日

特集展示

「新収蔵記念 魅惑の華南スタイル 華南三彩陶磁と井伊家伝来茶道具」

を開催します

このたび、彦根城博物館において、みだしの展覧会を開催いたしますのでお知らせします。

記

1 展覧会名称

特集展示「新収蔵記念 魅惑の華南スタイル 華南三彩陶磁と井伊家伝来茶道具」

2 会 期

令和6年(2024年)10月2日(水)～令和6年(2024年)11月4日(月・休)

開館時間：午前8時30分～午後5時（入館は午後4時30分まで）

＊テーマ展「金のきらめき 一輝きの日本美術一」と同時開催いたします。

3 会 場

彦根城博物館 展示室 3

4 展示の趣旨

華南三彩は、中国・明時代(1368～1644)後期に華南地方で焼かれたやきものです。日本へは16世紀末から17世紀前半にフィリピンやベトナムを経由してもたらされ、主に茶の湯の道具として用いられました。緑や黄、紫の鉛釉を掛け分ける三彩の技法で制作されており、日本では、この種の三彩作品が交趾（現在のベトナム）を産地とすると考えられていたために、「交趾焼」と呼ばれてきました。華南三彩の鮮やかな色遣いは人々を魅了し、京焼や九谷焼などの発展にも大きな影響を与えました。

この度、新発見の希少な華南三彩壺が当館に寄贈されました。本展では、この新収蔵品とともに、井伊家伝来茶道具に含まれる華南三彩の優品を展示し、未解明な点の多い華南三彩の制作状況や制作技法、日本における受容の様子を紹介します。

5 展示作品

	作品名称	員数	時代	所蔵者
1	三彩宝相華文五耳壺	1口	中国・明時代	当館(井伊家伝来資料)
2	三彩宝相華文五耳壺	1口	中国・明時代	当館(井伊家伝来資料)
3	三彩宝相華文壺	1合	中国・明時代	当館(個人寄贈資料)
4	三彩荒磯文香合	1合	中国・明時代	当館(井伊家伝来資料)
5	湖東焼 青手古九谷写鳳凰文平鉢	1枚	江戸時代後期	当館(井伊家伝来資料)

6 観 覧 料

一 般 700円(560円)

小・中学生 350円(280円) ()内は30名以上の団体割引料金

＊テーマ展「金のきらめき—^{かがや}輝きの日本美術—」および常設展「“ほんもの”との出会い」も併せてご覧いただけます。

問い合わせ先

彦根市教育委員会事務局

彦根城博物館 学芸史料課

担当：奥 田 晶 子

(電話 0749-22-6100)

* 番号は作品リストの番号と一致します。

1 三彩宝相華文五耳壺 1口

口径13.8cm 底径15.7cm 高35.5cm

中国・明時代

当館蔵（井伊家伝来資料）

中国南部の華南地方で制作された壺です。日本に舶載された後に、抹茶の茶葉を入れる茶壺に転用されました。胴部中央部には宝相華、下部には蓮弁の模様が、貼花という文様貼付の技法によって表されています。彩色には、鉛釉を掛け分けて低火度で鮮やかに発色させる三彩の技法が用いられています。

三彩は、唐代(618～907)のものがよく知られていますが、本作は、明代(1368～1644)に制作された作品で、「交趾焼」と呼ばれるものの一種です。これは交趾（現在のベトナム）が産地と考えられていたことによる名称ですが、近年の研究により、中国南部で制作されたものだということが分かってきました。

茶道具の中では、小型の合子を香合に転用した交趾焼の作品がよく知られていますが、本作のような大ぶりの作品は多くは知られていません。この茶壺は、交趾焼の多様な姿をうかがわせる希少な優品と言えます。



3 三彩宝相華文壺 1合

口径12.0cm 底径15.1cm 高23.8cm

中国・明時代

当館蔵（個人寄贈資料）

作品1同様に、中国南部の華南地方で制作され、日本に舶載された壺です。この度、新たに発見され、当館に寄贈されました。全体の器形や宝相華と蓮弁の模様表現、彩色技法などが作品1と類似していますが、蓮の花弁数や模様形態などがやや異なります。この相違は、制作年代等の違いを示していると考えられます。現在は耳が一つですが、もとは作品1同様の五耳壺だったと判断されます。

底部には、「ふたなし／風袋／六百七十目」という墨書が確認されます。これは、蓋の無い状態での風袋（器）の重量が670目（約2,500g）であることを記したものと理解され、貯蔵容器として用いた際の覚書と考えられます。

蓋部分は、素地および釉薬の質感が本体と異なるため、日本にもたらされた後の後補と推測されます。



底部墨書

「ふたなし／風袋／六百七十目」

4 ^{さんさいあらいそもんこうごう}三彩荒磯文香合 1合

口径7.6cm 高6.5cm

中国・明時代

当館蔵（井伊家伝来資料）

^{こうごう}香合は、^{こうぼく}香木や^{ねりこう}練香などの香料を入れる蓋付の小さな器で、茶席などで香を焚く際に用いられます。本作は、作品1から3と同じ中国・華南産の三彩陶磁の一種で、波を緑釉で、蓋の魚や海老には黄釉を掛け分けて彩色しています。型を使って模様を押し出す技法で制作されており、同じ形の作品が量産されたと考えられています。

本品は、井伊家^{なおすけ}13代直弼の茶会記である『^{とうとみずやちょう}東都水屋帳』に、安政5年（1858）12月の江戸屋敷での茶会で用いた旨が記述されています。

